ハイスクールD×D- Formal Abnormal-

素品

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とても身勝手な話をしよう
きっと報われない話になる
この世界を『存在しない神』は許しはしない
僕は所詮、無能なデミウルゴス
それでは皆さん、さようなら

※『我は喰らいて今を見る』の設定再編版です。基本原作沿いに進む作品になります。ただし転生者が紛れ込んだ所為で、原作の設定が根本的に改編されており、原作の八

割ほどが作者の勝手な解釈と設定にすげ替えられています。
そして主要キャラ、敵キャラも大体がチート化し、転生者どもはその上をいくチートのカーニバル状態になります。
作者は藤田　和日郎先生の作品に多大な影響を受けており、さらに奈須きのこと正田卿、中二とＮｉｔｒｏ＋脳を拗らせています。
よろしければ、どうぞお付き合いをば。

目次

prologue
幼年期の終わり ―――― 1
一節　教会の獣
第一話　獣は料理好き ―――― 15
第二話　親しくない仲にこそ礼儀あり ―――― 26
第三話　聖剣は凶犬に傅く ―――― 37
第四話　夜食はカップ麺 ―――― 61
第五話　変わらない友情 ―――― 75
第六話　男子高校生の日常会話 87

prologue
幼年期の終わり

『ソレ』は震えていた。
黒くて、真っ黒。形という形を成せていない、落ち葉の裏を返したように蠢く住人たちよりも、より矮小で弱々しい物体。
だが、『ソレ』には知性が感じられた。
よく見れば判る。何かに成ろうとしている。
小さな『手』を動かして、細い『足』をばたつかせて、藻掻くように肺呼吸を繰り返しながら、ただただバタバタと全身運動を続けている。
歩き方を忘れたのだろうか？

『ソレ』はひどく、不自由に見えた

話し方を知らないのだろうか？

『ソレ』は必死に、何かを訴えているように見える

泣き方を、知らないのだろうか？

泣き声は響くのに、『ソレ』は涙を流せていなかった

ひどく、悲し気に見えた。
ひどく、狂っている。
ひどく、憎んでる気がする。
ひどく、馬鹿馬鹿しくなっている。

ひどく、無様だ。
もうどうしようもないのに諦めきれていない。
何かが足りないのだ。
足掻く為にも、抗う為にも、怒りに身を任せる為にも、吼える為にも、思い出す為にも、歩き出す為にも、生きる為にも、足りない。
見限る為に、殺す為に、滅ぼす為に、”喰らう”為にも、何もかもが足りない。

――――あなたも、独りぼっち？

赤い手が、小さな『ソレ』を包み込んだ。
暖かな温度と花のような甘い香り、柔らかな肉の触感が、かつての営みを想起させられ、頭の先から呑み込まれて溺れていく感覚は安心に近い感情を齎した。
腕の中で暴れる『ソレ』を尚も愛し気に、決して離れないようにと、もう離さぬように抱きかかえる。
それは何処か、麻薬のようだった。

――今日から私が、あなたのお母さんよ？

真っ赤な子供の血で濡れた腕は、尚も慈しむように、抱き締めた。

「・・・・・・年貢の納め時、だな」

人は光の中に居ようとする。

例え他人を押し退けてでも、執拗と言っていいほどに安寧のような、安らかで暖かな居心地のいい場所を求めている。

そんな癖して、光の中で在り続けようとするのに、その光が強すぎれば逃げるように影の中へと潜り込んで堕ちていく。

この世界は、酷く単純なわりに複雑怪奇な二つの事で完成されていた。

”奴ら”はこの世界を、そう造り上げた。

息を吹き掛けられるくらいに感じられる夜の闇が包み込む。それでも、人間の繁栄の象徴とも言える人工の灯火が、辺りを埋め尽くすビル群にその身を反射させ、空に瞬く星々の儚い光を塗り潰し、深まる夜の中で終わりを見せない喧騒を照らしていた。

金も、物も、数知れぬ数多の命の営みも、総てが見えぬ一秒先の破滅に過ぎ行く一秒前の己を思い踏破する。善を志す者も、悪を敷く者も、栄華と衰退の繰り返しを飽きもせずに重ね積み上げる。それらは日常であり、ありふれて掃き捨てるような当たり前、それなのに貴い、薄氷のような精緻さと輝きが溢れる世界。

見果てぬ、もしくは既に見飽きて忘れ去ったであろう未知が零れて溢れる光景を高層ビルの吹き荒ぶ風に感じながら、男は眼下の世界に今回の獲物の姿を据えた。

光の届かぬ極所。人の見地も至らぬ、陰鬱な底辺。聖職者さえも見放し、目を背ける底の抜けた奈落の深淵。

泥と吐瀉物、排ガスに脳幹を犯す腐敗した生き物たちの臭気が蔓延した、街の裏。美麗な絵画の裏地に隠された汚点。

そこをひたに這いずり、逃れようとする異形が一匹。

「さて、行きますか」

男は何の躊躇いもなく、ビルの屋上から飛び降りた。

◇　◇　◇

ズルズルと、本来なら肉の内に納めておくべき腸(はらわた)が塵の転がるコンクリートに引き摺られ、ピンクの欠片と深紅の血漿を撒き散らしながら童話のパンクズのようにその道行きを押し付けていく。

彼は逃げていた。自分を追いかけ、追い詰め、右半身を”喰い千切った捕食者”から。

刻一刻と勢いを失って、暗雲な光りの陰りに自身の命の炎が焼失していきながら、それでも”死ねない体”に冷えていく脊髄の感触が自分の限界を囁いていく。

「チクショウ!?　せっかく自由になれたのに・・・・・、何もかもから解放されたのに

!!　それなのにっ!?」

不意に視線が上空に跳ね上がる。

その男は地面より遥かに離れた高所から、こちらに目掛けて落下している。

笑えてしまえるほどにシュールな光景であったし、そのままセルフで死んでくれるならこれ以上ない幸運であろうが、脚を畳むように墜落の衝撃を分散し、事も無げに男は着地してみせる。

男が眼前数メートル先に立ち塞がった。

「なんだよ・・・・・・、俺が何をしたってんだよ?」

声が震えだす。意識せずに奥歯が鳴り始める。

男は無言だった。目の前の重症ではすまない大怪我を相手に、異常と言える程に男は平静だった。

「確かに、俺は『神』の教えに反したことをした。だけどよ!・　やれ禁欲だ、『神』のためだ、『神』の御意志だとか何とかそればっかりだ・・・・・・。そればっかりなんだよ!!　俺は何だ?　俺は俺だ!　顔も姿も見たこともねぇ野郎の道具じゃねぇ!?」

赤黒い液体の混じった唾液と共に瀕死の男は叫び、落涙させながら己が身の非業を切に訴える。例えそれが、的外れな逆怨みであったとしても。

「だから俺は『悪魔』になったんだ!!!」

瀕死の男の体は、すでに人間として範疇を超えていた。
軽自動車を軽く上回る体躯に、白い紙のように脱色された病的な肌は、蛆が蠢くかのように隙間なく痙攣し引きつりを起こし裂傷を作っては流血箇所を増やしている。上半身こそ、右肩から下が”削げている”ことを除けば、まだ人間としての形をなしていた。だが腹部から下には、幾つもの人間の頭部が貼り付き、まるで木の根のように、何かを求めるように骨のごとく節くれだった腕を暴れさせている。

――はぐれ悪魔（バケモノ）　アダム

醜悪かつ幼稚、それが男の正体だった。
「なのに、口を開けば契約契約、そればっかだ！　悪魔は欲望に忠実で快楽に溺れる屑共じゃなかったのかよ!?　これじゃあ、”俺たち人間と何も変わらねぇじゃねぇか”！　ウザッてぇ、ウゼェんだよ、糞悪魔が理性を語るな!!　だから、殺したんだよ。新しい主様を！　もう俺を縛るもんはねぇ、神だろうと悪魔だろうと俺の自由を邪魔するヤツは残さず皆殺しにしてやるんだよぉ!!!」

興奮したような絶叫で喉を震わせながら、しかし勢いを増して噴き出す血液も気に止めずアダムは笑う。
楽しげに、狂ったままに、陰惨な嘲笑で頬を引き裂き尚も笑った。
もはや後戻りも出来ない自分の姿に、アダムは笑った。
「三十八人」
「あん?」
「あんたが拉致し、遊び半分に玩具にして、喰い殺した女性の数だよ」
ここに来て、アダムの前に現れた男が口を開く。
そこから語られた内容はあまりにも凄惨極まりない猟奇な悪行であり、ここに彼ら二人以外の人間が居れば誰もが閉口し口を抑えるであろう最悪なものであった。
だが男の声には理不尽な殺戮に対する怒りではなく、場違いな同情の色が滲んでいた。
「へぇ、三十八か。意外と少ねぇな」
「足りねぇか?」
「あぁ、足りねぇな。テメェも、そんなことを訊いてどうする気だよ?　まさか俺の右腕喰っといて、ただで済むと思ってんのかぁあああ!!?」
アダムの左手の一本一本が境の部分から縦に裂けていき、別れた指は肥大化、巨大な

百足のような姿へと変貌し、唾液の代わりの血を吐きながら生え揃った牙を男に突き立てようと素早い動きで迫る。

「別に、どうするかは最初から決まっちまってんですよ」

圧倒的な力と生理的嫌悪感を加速させる現状に対し、それでも男は動じずに迫る悪魔の徒党にじっと視線を据える。

悠然と大胆不敵に、それでいてぶっきらぼうに、加えてどこか哀れむような色を乗せて、言い放つ。

「同情はするよ。あんたは運がなかった」

襲い掛かる巨大な害虫を、上体を逸らすのみで手早く躱すと共に、男の”左目が蠢いた”。

瞼を掻き分けながら現れるのは、”黒い触手”。

粘液質でコールタールのように泥々と溢れだしたそれらが、瞬く間すらなく片手分の百足たちに絡み付けば、まるで捻切るように手繰り寄せ、遅れて形成された”漆黒の顎（アギト）”の中へと次々に引き摺り込んでいく。

自分の身を裂いて造り上げた百足たちが皆一様に咀嚼されるのを、目を剥くながら

立ち尽くすアダムが次に見たのは、喰い殺すはずだった男の眼孔から這い出てくる金色の球体、それを中心に纏わりつくように形となっていく一本の兵器。
最初に刃、次に砲口、堅牢な盾が追加され、最後に柄が顕れれば、遂に完成する。
無骨で巨大、それはクロガネ色の銃剣だった。
「シッ!」
僅かな駆動音を響かせながらに短く呼吸、吸引した酸素を糧に男の体が前へ弾かれる。
呆けたように動かぬアダム目掛け一息に接近、スレ違い様に胴体を両断し、斬り離した半身が地に落ちるより早く残された下半身に向けて躊躇いなくトリガーが引かれる。
それに反応し放たれた一陣の熱波が、瞬く間にアダムの下半身を焼き払った。
「・・・・・・ちくしょう、最後の最後で、お前みたいなヤツに目を付けられる。せっかく人間も辞めたってのに、どこまで最悪なんだよ、俺の人生は、よぉ」
悲鳴と奇声をあげながら燃えていく自分の半身を視界の隅に見ながら、静かに歩み寄る男の方に首を転がして見る。
達磨にされ、地面に横たわる無様な姿を晒しながら、どこか安心したかのように近寄

る自らの死期、空っぽになった左目の代わりに右目の眼球らが自分を見据えるのに、アダムは息を吐いた。
「・・・・・・なぁ。お前、神に祈ったことあるか?」
「どう見えます?」
「まぁ、優等生には見えねぇな」
肩を竦めるように答えた男に、アダムは笑い混じりに冗談を返した。
さっきまで殺し合っていたというのに、二人の間に流れる空気には微塵の緊張も、悪意も存在しない。
声だけ聞くなら、珈琲でも片手に持ちながらの談笑にすら聞こえてくる。
「そう言うあなたは、優秀だったらしいですね」
「あぁ、唯一の自慢だ。それも今じゃあ、この様だ」
「人間、どうなるか分かんねぇもんですよ」
「お前が人間語んのかよ。俺より化物らしい化物じゃねぇか」
「一応は人間のつもりですよ。これでも、ですけど」
既知の友人のようにアダムは笑ったが、男は困ったような苦笑を浮かべながら足下に転がるアダムに目を細めた。
救済はない。

神はそういうものだ。
人の届かない所で人を愛でながら、彼は何も与えない。
それなら代償有りでも物を与え、さらに甘えさせてくれる悪魔の方がまだ魅力的に見えてくる。
これは当たり前で当然のことであり、当然の報いをもって終わる寸劇に過ぎない。
「何か、遺すことは?」
これで最期だ。
あとは死に逝くのみの彼の喉に剣先を置きながら、男が静かに問い掛ける。
死後に救いはない。
ならば、聴かねばならない。
彼の悔い、未練、やり残したことを。
「・・・・・・なら、この世界を作った奴に言ってくれ。『死に腐れ』だ」
突き刺す。
深く、深く、痛みすら感じぬ間に命を狩り奪い、自らの糧にする。
哀れな悪魔にも不相応の大振りの剣をもって、巷を賑わせた連続猟奇殺人は終結されたのだった。
「・・・・・・・・・・・・・・」

男は懐から携帯端末を取り出し、ロックを解除する。
上役への連絡するためだったが、上司の番号を押す前に呼び出しの音が鳴り響き、画面一杯に通知を示すアイコンが表示される。
表記された登録名は、【サイクロプス】。
「・・・・・・取り敢えず、伝えとくよ」
通話状態にした携帯を耳元で構え、向こうにいる存在に向けて、男は言い放つ。
相手の嗤い声が聞こえてくる。
今まさに男が言う言葉も、そいつにとっては享楽のネタでしかないのだ。

「『死に腐れ』、この糞野郎」

世界が始まる。
新たな物語。
演者が叫び、【転生者】が歩み出す。

一節　教会の獣

第一話　獣は料理好き

教会という組織がある。
聖地奪還を主眼とした十字軍、テンプル騎士団を母体とし東方・西洋の総てが悪魔殲滅という不退転の宿願の元一つとなり、神の威光と無垢なる信仰によって無力な子羊たちを守護する、祓魔師（エクソシスト）の本拠地だ。
十字軍遠征以前にまで遡るならば悪魔祓いそのものの歴史は古く、そして深い。
そんな歴史の中でも、有り余る武勇と力を語り継がれる者たちが幾人もいる。
特に現代の中では『最恐』とまで謂わしめた女性祓魔師、『最強』と称される神器遣いの少年の名が真っ先に挙がるであろうが、その中でも神の信徒であるなら誰もが畏れ嫌う『最凶』の存在があった。
曰く、神を貶める人非人。
曰く、人の皮を被る怪物。
曰く、異形。
その身には神の呪いか悪魔の奇蹟か数多の怪物を宿し行使する、その様から名付けら

れた忌み名は【十の王冠を拝する獣】。
黙示録の獣と同列に呼ばれる男は、人の崇める光に背を向けながら悪魔を狩り続けている。

◇　◇　◇

「・・・・・・ここ、なのか？」
「ここのはず、なんだけど？」
イギリス某所、一件のアパートメントを前にし、一枚のコピー用紙を片手に持った聖職衣に身を包んだ少女が二人いた。
燦々と降り注ぐ日の光に流れていく入道雲が夏の風情を感じさせる陽当たりのいい物件。周りを見れば走り回る幼い子供たちの笑い声や母親たちの談笑が聞こえ、近場には幾つもの店舗が並ぶ良立地。
ここが”例の男”が住む場所だと思うと釈然としない二人だったが、ありふれた平和と日常に満ちた風はお構い無しに頬を撫でていく。
「本当にここなのか、イリナ？」
「ここの筈なのよ、ゼノヴィア・・・・・・」
噂に聞く男のイメージとは真逆の印象を受ける住まいの環境に、ゼノヴィア・クァルタと紫藤　イリナは、半ば途方に暮れる思いで立ち竦んでいた。

「まぁいい、さっさと行こう」
「あっ、ちょっと待ってよ！」
割りと大雑把な嫌いがあるゼノヴィアがズンズンと進んで行くのを追うように、栗色の髪を揺らしながらイリナも階段に足をかける。とにもかくにも動かぬ限り事態は進まない。決意を新たに、資料にあった名前と同じ表札が貼り付いた部屋の前まで移動する。
妙な緊張感が走る体を奮い立て、インターホンを押した。
「「・・・・・・・・・・・・」」
ピンポーン、という間の抜けた音が鳴ったが、扉の向こうが動く気配はない。
そんなことを二度、三度と繰り返したが、依然として家主が現れる気配は一切なかった。
「居ないのか？」
「いえ、鍵は開いてるわ」
イリナがドアノブに手を掛けると、それは何の抵抗もなく回った。
無用心だとも思ったが、そもそも教会の出頭命令をガン無視した所為で自分たち自ら出向く羽目になったのだから不法侵入くらい大目に見ろと、貯まる鬱憤をそんな八つ当たりに込めながら、ゼノヴィアは”布に包まれた長物”を、イリヤは”懐に忍ばせたも

の”を確認し、少しの躊躇いを見せながらも扉を開け放つと、

「ん？　なんだ、この香り・・・・・・」

ふわりと鼻腔を擽る嗅ぎ慣れない匂いに怪訝な表情を作るゼノヴィアだが、それは悪臭などといったものとは程遠い、空腹を誘うような温かなものだった。

たちまちリードに繋がれた犬のように匂いに誘われるまま部屋の奥へと進んでいくが、イリナは当惑に足を捕られ動けないでいる。

なぜ、どうして、こんなところで”この匂い”がする。

あり得ない、と思いながらも僅かに残る冷静な部分に相方を追えと急き立てられながら、漸く地から離れた足で踏み出し進んだ。

大した歩数を稼ぐこともなく視界は直ぐに広がり、棚賃の割には面積のあるダイニングに着く。

整頓されている、というよりは純粋に物が少ない印象が強い部屋。そんな情報を視覚から脳の隅に押しやり、すぐさまにキッチンの方へと視界を走らせた。

この匂い。

とても郷愁を掻き立てられる、母の手料理の匂い。

これは間違いなく――――

「？　何してるの、ゼノヴィア？」

カウンターの影に視線を落としたままに動かない彼女を見つけた。
普段からあまり感情を表情に出すことの少ないゼノヴィアだが、まるで道端で雪男とスレ違ったような、つまりは奇妙奇天烈な物を発見したような困惑しきった顔をしている。
ちょいちょい、と人差し指で影の向こうを示すゼノヴィアに言い知れぬ不安を感じながらも、恐る恐るに身を乗り出すように覗き込む。
最初に見えたのは、床の上に置かれた人一人分は有るような大きな置物。
というか、まんま人間がいた。
「〜〜〜〜っ!!?」
声にならない悲鳴を上げながら思いっきり背後の壁に貼り付くイリナだが、反対にゼノヴィアはゆっくりと男の背後へと近づく。
改めて見ると男は日本で言うところの”正座”の姿勢で微動だにせず、ただ一心に何かを見詰めているではないか。
”それ”が何なのか分からず、疑問符を浮かべるゼノヴィアに、それは唐突に”ピーーーッ”というけたたましい音を鳴らし始めた。
突然のことで反射的に背中の物に手を伸ばしかけるが、危惧するようなことは発生しない。じゃあ、今のは何の音なのか？　そう思い直して男の背越しに見える、家電品ら

しき物は彼女にとって見覚えのないもののため、何なのか判別することできない。
すると、音が鳴り止み数秒、男がそれのボタンらしきものを押すと、上蓋が緩慢な動きでその中身を晒しだした。
「あれ、それって”炊飯器?」
戦線復帰したイリナの声と共に”それ”、炊飯器は己が成した仕事の成果を三人に示す。
そこには地味色に燦然と輝く、『炊き込みご飯』があった。
◇　◇　◇
「お代わり、頂けるだろうか」
「ペース早えなお前いいぞ遠慮せず食せ」
「・・・・・・・・・・・・・・」
なんだこの状況は。人生未だ十七年と少しという若さだが、それでも紫藤　イリナという心がこれほどに困惑で満たされることはなかった。
というのも現在、先程まで正座していた変人、もといこの部屋の主と思われる『目に黒い包帯を巻いた男』と、彼が作った料理で昼食を共にしているということにだ。
紫藤　イリナは日本人だ。
部屋に入った時に嗅いだ、日本固有の出汁と味噌の香り。

日本に居たのは物心ついての数年程度だったがその香りは頭が、何よりも日本人としての血が覚えている。

「どうした？　さっきから箸が進んでねぇけど、もしかして食えないものあったか？」

そう言って心配気に声を掛けてくる彼にどう返すべきか、そう思い本日の献立を見渡す。

まずは主食の炊き込みご飯。主菜に海老や白身魚の天ぷら、副菜には葉物野菜のお浸し。そして豆腐と玉ねぎにワカメを入れた味噌汁と、昼食には少々重めのラインナップ。

だがしかし、日本食離れて早数年。そんなイリナに、この布陣は忘れかけた日本の血を揺り起こさすには十分過ぎた。

「・・・・・・いえ、大丈夫です」

どれもこれも美味い。

天ぷらなんて揚げたてであるから美味いのは当たり前だとしても、味噌汁の全身に染み入るような独特の旨味、何よりも大豆の魔術師こと日本が代表する調味料、『醤油』の存在があるのは大きい。

そして、主食たる炊き込みご飯。

通り一辺倒な鰹出汁ではない、複数の素材から取られた合わせ出汁の地味深さ。大き

めに切られた筍や椎茸、人参たちもよくその出汁を吸収し、米たちも彼らの味をよく吸い上げており、もはやこれだけで十分にご馳走である。

となりのゼノヴィアも、最初こそ醤油や味噌の塩っ気に難色を示していたが、慣れてしまえばこれこの通り。表情こそ変わらぬが、その瞳には星屑が煌めいている。

日本文化初の彼女でもこれだ、純日本人であるイリナに至っては、先程から祭り囃子と一緒に理性に的確なボディーブローを撃ち込んでくる本能を抑えるのに必死であった。

「なぁ、お嬢さん方。食いながらでいいから聞きたいことあるんだけど、いいか？」

「んむ？」

「あ、はい。なんでしょうか？」

「俺に用があって来たんじゃねぇの？」

「「あっ」」

半ば夢中に成りかけていた二人だったが、包帯男の言葉に本来の目的を思い出す。

慌てて取り繕おうとするイリナだが、対してゼノヴィアはマイペースに食事を続行している。そんな彼女が色々窘めるようなことを言われるのを眺めながら、包帯男は口を抑えて肩を震わせているのだった。

凸凹コンビ、二人はまさにそんな感じである。

「それで、お前が【獣（ビースト）】でいいんだな？」
「・・・・・・・あぁ、まぁ、そうだよ」
詰め寄るイリナを左手で制し、右手のフォーク（箸は断念）で海老を突き刺しながらゼノヴィアが問いかけに、包帯男は渋々ながらに頷いた。
どうやら本人自体は、この呼び名を好んではいないらしい。
「こう言ってはアレだが、本当にお前がそうなのか？　噂とは似ても似つかないが」
「噂じゃ、俺っつーのはどういうアレなんだよ。いや、いい。大体分かってる」
どうせ怪物とかそんなんだろ、手を合わせながら空になった茶碗を重て片付けながら男は呟くように溜め息を吐く。
そんな彼に次はイリナが質問を飛ばした。
「”その目”だけど、見えてるの？」
そう言って彼女が指差したのは、男の視界を隙間なく塞ぐように巻かれた黒い包帯。
誰がどう見ても、今の男は盲目の状態だ。
そうでありながら食器の出し入れや食材の調理を問題なくこなし、今も自分を指すイリナの指を凝視している。
「確り見えてるよ。目の前に青い髪に緑のメッシュ、栗色のツインテールの女の子が二人いるのも、はっきり分かる」

男の返答は、肯定だった。

二人の髪色を、二人それぞれを見ながらに答えてみせる。

「ということは、その包帯のお陰で見えてるってこと？」

「魔導具の類いか？」

「どっちも正解。一応、異端審問（インクジエイター）にも認可は通してる品だよ。見える物より、見えないモノの方がよく見えたりするけどな」

一頻り笑うように言い放つ彼だったが、つまりは”そんなもの”を使わなくてはいけないような理由があるということに他ならない。

今回の仕事において、この男の存在はかなり大きい。

前評判抜きにしても、単純な戦闘能力で言えば教会でもこの男に勝る者はいないと言う。『最強』が繰り出す天変地異の中を平然と突き進んで来たという話すらあるくらいだ。

――――誰がこの獣と匹敵し得ようか。誰がこれと戦うことができよう――――

ヨハネの黙示録　13章の一節。
誰が最初にそう称したかは分からない。
だが、彼にはそう揶揄されるだけのものを持ち、そう囁かれ続ける力を奮うことができる存在だ。
事実、教会の元で働く者でありながら、彼に信仰心はない。金で雇われ、得るために悪魔と戦っている。神の為に戦う彼女たちからすれば、そんな不埒な理由で戦う者と一緒にされるのは我慢ならないだろう。
そうだとしても、神の愛は深く、それでいて分け隔てないもの。
「とりあえず、自己紹介だな。これから一時の仕事仲間だとしても、名前くらいは知っておきたい」
ともかくも、事は既に起きている。
男に仕事の内容を伝える。急がねば甚大な被害が出ることも。
ここ数世紀でも類を見ない大事件が始まる。
「俺は賽之目（さいのめ）　双六（すごろく）。少しの間だろうけど、よろしく」

第二話　親しくない仲にこそ礼儀あり

駒王町。そこは悪魔が統治する土地である。

領主はルシファーを輩出した血族のリアス・グレモリー。十代にして上級悪魔として眷属を従え、その愛情を持って駒王学園のオカルト研究部にて、まさしく悪魔的な平温を享受する少女だ。

そんな彼女の元に、おそらくその半生の中で最大級の厄介事が舞い込んできた。

「先日『聖剣』が三本、カトリックとプロテスタント、そして正教会のそれぞれから奪われました」

犯人が逃げ込んできたのは日本、そしてここ駒王町に潜伏しているということだった。

それを奪還、及び破壊を命ぜられて遥々やってきたのは三人。内二名のシスターは『破壊』と『擬態』の権能を埋め込まれた聖剣を携えてだ。

只でさえ悪魔と教会の組み合わせは最悪、しかも教会にとっての最上兵器の聖剣が自分の領地に四本もある。気の遠くなりそうな自分を無視し、挑発とも取れる言動でこちらを刺激、果てには眷属、アーシア・アルジェントに救いと称して聖剣を突き付けるシ

スターに、一人の少年が叫びそうになったとき、それは動いた。
「い　い　加　減　に　し　ろ　！」
鈍く、それなのにやたらと大きく響く、とびっきりの拳骨が聖剣を持ち出した少女、ゼノヴィアの脳天に稲妻の如く落とされた。
「な、何してるんで　シュギャ!?」
「お前も同罪だイリナ！　自分たちに任せろっつーから黙ってたが、俺たちが如何に厚顔無恥で年齢一桁ばりの我儘言ってんのか分かってんのか？　なのに、好き勝手喋りやがって、聖書読む前に自己啓発本片手に社会常識を学べアホ」
その場の全員が驚きに目を剥く中、黙していた目に包帯を巻いた男が、動かなくなったゼノヴィアに溜め息を吐きながらもう一方のイリナにも拳骨を落とし、くるりとアーシアの方に向き直る。
「悪いな、アルジェントさん。馬鹿みたいな話だけど、これでも悪気はないんだよ」
苦笑、引き笑い、不祥事を起こした時の大人のような引き攣った微笑(えみ)を浮かべて、男が皆に頭を下げた。
アーシアは、元教会の人間だ。
暗い面を覗くことのない、敬虔で善良な信徒としてのみの側面ではあったが、如何にその場所が悪魔を毛嫌いしてるかは爪の先程度でも知っていた。だから、ゼノヴィアの

行動も受け入れられないながらも、そういう態度を取られることに理解はあった。
だが、この包帯男の行動はまったく予想の範囲外だ。
悪魔という存在を忌避し、嘲り、排除しているのが教会であり、その神の意思の執行者である祓魔師が、悪魔に身を堕とした者に頭を下げるなど前代未聞。
異様な光景であり、まさに異常であった。
「リアス・グレモリー様」
「！　何かしら？」
「此度の教会の不始末、それに加えて当方らの礼を失した態度に不遜極まる言動、何よりも貴女の眷属へ独善的な思考にて刃を向けたこと、申し訳ありませんでした。そして、アーシア・アルジェントを救っていただいたこと、感謝の言葉もございません」
もう何もかも常識外れだ。
目の前の現実と頭の中の当たり前が火花を散らし、ニューロンそのものを焼かれていくような痛みがズキズキと苛んでくる。
「あなたは救ったと言うけど、アーシアは悪魔になってしまったのよ？」
「いやいや、こちらも〝情報〟は受けてます。野良（はぐれエクソシスト）の始末は明らかに此方の不手際ですし、彼女をどういう形であれ、救済してくれたのは貴女たちだ。地べたに頭擦りこそすれ、事を構えようなんて思いませんよ」

「・・・・・・・・・あなた、本当に教会の人間？」
「これでも司祭の資格持ってますよ？　説教壇に登っても身内しか来ないという地獄を見ましたけど」
「？」
「あれですよ、めっちゃ練習した初ライブで観客が一人も居ないのでもキツいのに、逆に出ていったら母親が一人最前列で応援に来ていたみたいな、そんな地獄でしたよ」
　まさかの初対面、しかも年下に黒歴史を晒すという自爆ギャグを繰り出し虚ろに笑う男だったが、リアスら悪魔勢には難易度が高いらしく、男が何を言っているのか理解できていない。しかし一人、彼の悲惨な体験に共感できた少年が居り、瞳に涙すら溜めて同情してくれていた。
　そんな奇妙な因果が結ばれつつある中、リアスは苦悶に蟀谷を抑える。
　貴族の出であり、若くして多くの眷属を抱える彼女でも目の前の男は初めてのタイプだ。教会という超差別的偏見武力集団でも、間違いなくこの男は異端も異端だろう。だからといって悪質には見えないし、三人の中でも一番発言力を持っていそうでもある。利用できそうではあるが、下手なことをして逆上されるのは御免だ。
　どうしたものか、大きく溜め息を吐くリアスに対して、男はまだ墓穴から脱出できていないのか自虐的な笑いを咲かせている。包帯で顔の半分は見えないというのに、表情

豊かな男だ。
ちらりと自身の眷属たちに視線を走らせれば、皆が似たような顔をしている。困惑、未知との邂逅、後頭部を豆腐で殴られたような、とにかくどうすればいいか判らない、といった感じ。
だが一人、他とは違う者がいる。
視界の隅、部室の最奥で自分を細い腕で掻き抱く真っ白な少女が、まるで溺れる際にいるような形相で孤立している。
「小猫？」
「っ!?」
白い髪の小柄な少女が、在り得る筈のない化物に囲まれたように顔を青くし、呼び出したリアスを視界に映すと、撥ね飛ばされたように駆け寄り影に隠れた。
呆気に取られる彼女の服を必死に掴み、明確な恐怖を震えと共に布地を通して伝えてくる。
それでも彼女は一点から視線を外そうとしない、外せないでいる。
歯鳴りを響かせながらも、泥沼に嵌まったようにそれを凝視するのは、逃げられない絶望に対し少しでも正気であろうと抗っているからであろうか。
「ねえ、一つ聞くけど、いいかしら？」

「あぁ、別に構いませ――――」

「その包帯の下は、どうなっているの？」

心が裏返っていくのが分かる。

さっきまでの評価も第一印象も全て廃棄し、改めて眼前の男を見定める。

主の変化に気づいた他の眷属たちが小猫と呼ばれた少女を見つけると、連鎖するように構え始める。状況こそ飲み込めていないが、どうしてそうなったのかは馬鹿でも察しがつく。

先までの曖昧でグダグダな雰囲気が消え、場の空気は一気に冷え込んだ。

これに一番慌てたのは、間違いなくこの男だ。

後輩二人から主導権を奪った瞬間から、適当なことを並べながら〝なぁなぁ〟な感じに流してやり、最終的にこの町で行動する認可を取り付けるだけの算段をつけていた。計算違いがあったのは、自分の『中身』に感づくような者の存在に気づけなかったこと。

男の拙い誤魔化しなど効きはしないだろう。元々、考えてることが直ぐに顔に出る質（たち）である彼の口先三寸の三文芝居が通じるわけもない。

どうする？　どうすれば、この状況を脱することができるだろうか。

顎に手を当て思考する仕草をしただけで次の瞬間には剣の二三本は突き刺さりそうな緊迫感の中、男は考える。

といっても、剣の二三本程度なら”何の問題もない”ので、あくまでも気楽にだが。
「えーと、何か誤解があるみたいですけど、この包帯は言ってしまえば矯正眼鏡みたいなもんで———」
「この人の名前は賽之目　双六。【獣（ビースト）】って言えば、あなたたち悪魔の間でも有名でしょ？」
悪魔たちの息を飲む音が聞こえた。
その原因、必死に誤魔化そうと策を巡らせていた男、賽之目　双六の努力を情け容赦なく溝に投げ込んだのは、むくれたように目を吊り上げる紫藤　イリナだった。
◇　◇　◇
「追い出されちまったじゃねーかー！」
未だに起きないゼノヴィアを背負った双六と、布包みの聖剣を抱えたイリナが市街地の中を歩いていた。
「五月蠅いわよ、この悪魔崇拝者！」
「何でそうなる!?　伊達に化物飼ってねぇけど、魂の切り売りするまで困窮してないわ！」
「あなたの二束三文にしかならい魂なんてどうでもいいわよ！　なら、何で悪魔にあんな義理立てるの!?」

「あっち頼まれる側でこっちは頼む側!!　どっちが上か下かなんて明白だろが！」
「それがどうしたのよ！　相手は悪魔でしょ!?」
「本気で言ってんのか?!　それくらいの分別もつけられねぇとか、お前社会に出たらどうするつもりだよ!?」
「余計なお世話よこの社畜!!」
「謝れ！　俺にじゃなく全国のお父さん、お母さんたちに全力で土下座しろこの親不孝者!!」
　ワーワーギャーと天下の往来で騒ぎ立て、かつて海を割った奇跡のごとく人波が開かれていく。
　火が点いてしまった口論は止めどころを忘れ、白いローブ姿の女の子と黒い包帯男という奇妙極まりない光景を作り上げていた。
「・・・・・・すご、ろく?」
「おっと、起きたかゼノヴィア」
　そんな二人に水を差すように、背中で身を捩りながらゼノヴィアが意識を覚醒させる。
　今の状況が理解できていないのか、寝惚け眼（ねぼけまなこ）で双六の背中に額を擦り付けている。
「とりあえず、お暴れの許可は貰ったよ。追い出されちまったけどな」

「・・・・・・双六」
「どうした？」
「何故あのとき、私を止めたんだ？」
微睡(まどろ)みから抜けきらない声音で、ゼノヴィアがそう問いかけた。
あのとき、ゼノヴィアが救済と称してアーシアに聖剣を向けたときのことだ。
彼女としては悪魔に身を堕としても信仰を忘れないアーシアを救う意味合いでもあったからか、それを止められたのが納得できないでいた。
「彼女はとっくに救われてるよ。お前のは要らぬ気遣いってやつだ」
そんなゼノヴィアに対し、双六はあっけらかんと努めて明るく答えた。
「神の愛を捨て、悪魔になることが救いだというのか？」
「救いの尺度は人それぞれだろ。神の許しがお前らにとっての救いなら、彼女の幸福は新しい仲間との絆なんだよ。見ただろ？　大切にされてるよ、彼女は」
「他者に友愛を求めれば《聖女》は終わる。そんなものに、神を捨てるだけの価値があるのか？」
「その《聖女》ってのは、あの娘が望んでなったもんじゃないだろ？　どうせ上の連中が仕立て上げたプロパガンダだろーがよ。・・・・・・マジでブラック企業だなオイ」
疲労、諦感、大人の真っ黒な裏事情を思い出し盛大に長々と息を吐き出す双六だった

が、イリナとゼノヴィアは狐につままれたような顔で見ていた。
それは正しく、価値観の違いだった。
二人にとって未知と異様に満ちた裏話は、彼にとっては身近なもの。
人の闇。世界の闇を、人並み外れた場所で、人並みから外れている彼は見てきた。
よっぽど、”この世の裏”というなら彼はその象徴の一人と言ってもいい。
だから、そういう時の対処の仕方は知っている。
今回の事件こそ、その締め括りなのだから。
「まっ、あれだよ。何が大切かを決めんのは当人であって、他人が口出すな、って話さ」
そう言って、双六はケラケラと笑い飛ばす。
他人は他人、自分は自分。その隔たりを必要以上に越えようとせず、かといって視界を掠めれば庇いもする。
正義漢ではない、言うなれば身勝手なヤツ。だが、人間らしい考え方をしている、それが双六の人間性であった。
「双六、降ろしてくれ」
「ん、もう大丈夫なのか？　殴った俺が言うのもアレだけど」
「いや、私も異性に尻を鷲掴みにされているのは初めてでな、流石に気恥ずかしい」
「・・・・・・双六？」

「待て、誤解だ。誤解しかないぞイリナさん。誓って言わせてもらうが、他意も下心も存在しない。決して私利私欲の為にやったことでないことを信じて欲しい。まず俺にとって女子高生はストライクゾーンから大いに外れているし、敢えて告白するなら俺は女性の尻よりも『ヘソ』に小宇宙（コスモ）を見る男　って、待って、聖剣はマズイッてばマズッ

いやぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

「いいから降ろしてくれないか?」

見ようによっては微笑ましくもある彼らを、沈みゆく太陽の橙色が照らし出していた。

第三話　聖剣は凶犬に傅く

雨が降る。配管をぶち抜いたような土砂降りが、夏の闇夜を雑音と共に熱を奪っていく。

「主よ、お守りください！　災いを退ける、ちか、らを・・・・・お与え、ください・・・！」

男がいた。

まだ若さの残る顔立ちを握り潰したように歪め、降り注ぐ雨の中で穴の空いた足を引き摺りながら息を切らし、信奉する神への懇願を唱え続ける彼は、教会の勅命により日本に赴いた神父の一人。

仲間は自分以外、連れ去られた。

失意と絶望、痛覚すらも失せた脚は吸い寄せられるように地面へ砕け落ちる。視界は霞み、縋る空気をいくら掻いても、起き上がる力はもうない。

「あ゛ッ、ぎぃい・・・・・・・!!」

脳髄に錆びた鉄を突き刺したような衝撃が、足から響いた。

街灯の灯りも遠い薄ぼやけた闇の中、自分の左足の太股からナイフが一本、新たに生

えている。これで三本目。
こんなもの、殺人ですらない。
もはや狩りでもない。
貴族が猟銃で狐を追い立てるような気品も伝統なんてものもない、子供が興味半分無邪気半分で道端の蟻を踏み潰す、それほどまでに低劣化した”お遊び”だ。
そして、”恐怖”が遂に男へ追い付いた。
「い、・・・・・・いやだ、来るなぁ!!」
夜の闇の中でも映える白髪に狂気染みた笑み。まず間違いなく年下であろう、成人すらしていない少年が足取り軽く近づいてくる光景に、男は喉が干上がる程に情けない悲鳴を上げる。
逃げなくてはいけないのに、刺さったままの刃以上の何かが男の体に纏わりついて、その逃亡劇を台無しにしている。
それでも足掻き、這いずり、地を掻き続けるも体は一向に前へ進まず、それどころか土そのものが自分に絡み付く『泥沼』になっている感覚すらある。助けを求めて張り上げていた祈りすら、掠れて雨音の波に飲まれて消えていく。
どこまでも白々しい、鼻歌混じりに伸ばされた腕が男の足を掴み、引き摺り歩き始めた。

他の神父たちが待つ、あの場所へ。
イカれた老人が待つ、悪夢の実験棟へ。
きっと彼処にあるのは死や拷問、そんなものが救いに昇華されるような地獄が待っている。
それこそ、あの場所は『聖剣計画』の焼き増しそのものなのだから。
「ッ!!」
ざわり、と少年は眼球に突き刺さるような”熱”を感じ、その感覚に逆らうことなく掴んでいた神父の足を離し横に跳び駆ける。
跡を追うように飛び込んできたのは、一本の剣。
「・・・・・・・へぇ」
自分目掛けて飛翔する剣はそれのみに留まらず、息を吐く暇すらなく、間に落ちる雨粒すら丁寧に両断する剣群は少年の命を食い破ろうと飛んでくる。
だというのに、少年の頬に刻まれるのは余裕と愉悦の微笑。
「おーやおや、これまた見覚えのある面した奴が現れましたね―」
見る者に不快感しか与えない、元よりそれが目的の下種な笑いを言葉の隅々に含ませて、少年は闇の向こうの”彼”に焦点を合わせる。
「・・・・・・フリード・セルゼン。まだ、この町に居たんだね」

短い金髪を雨の粒で濡らしながら一人の悪魔、木場　裕斗は自身の内から鍛造した剣を眼前に突き示した。
「答えてもらうよ。何故この町にいる。その神父は何者だい？」
「あらーん？　何で僕さまがお前みたいなファッキン悪魔君に、っんな親切しなくちゃいけないんですかねぇ」
ゲラゲラとわざわざ腹を抱えてまで笑ってみせる男、フリード・セルゼンの態度に予想通りとはいえ腸が煮えくる苛立ちを覚えるが、この男のそれが今に始まったことじゃない。
以前に出逢った時、フリードという人間性を十分過ぎるほどに理解させられた。
そもそも、コイツが五体満足で歩き回っていることが間違っている。
外道と下種を煮詰めた戦闘狂の快楽主義者であり、破綻しきった凶気の権化。
それがフリード・セルゼンという人間だ。
「まぁ、話した所で此方に一切問題なんて無い無いなんですけど、悪魔なんていう恒久的有害物質を処理しないのは人としてどうかと思いますし、さっさかお掃除しましょうか。汚物はゴミ箱、悪魔も仲良く腐って死ねや」
侮蔑と悪意、死体を眺める視線で裕斗を見下しながら、おもむろに背中へ【右手】を回し、掴み執る。

フリードの行動全てが凶行と言っていい。
裕斗は知っている。だから、するべき行動をする。自分の”内”に意識を降ろしていき、底から選び抜いた得物を引き揚げていくが、

瞬間、迸る閃光が一帯を焼き尽くした。

「ッがぁあああああああ!!?」
焼ける、焼ける、髪の一本に至るまで満遍なく、光に当てられた箇所が蒸発したような激痛で裕斗の全身を染め上げる。
『悪魔の魂』が燃えていく感触。
悪魔という特異な種族は、無限に近い寿命と膨大な魔力を内在する高次生命体ではあるが、その反面で伝承や民話にあるような聖水や十字架といった聖別された物に拒絶反応を示す。
彼は知っている。
この痛み、この感覚を。
かつては膝を地につけ手を絡め合わせ祈り平伏し、ひたすら一縷に信じ暗雲すら霞む地獄の底に、その威光と神聖な天上の光が差し込むのを待ち焦がれていた、あの日々を。

覚えている、忘れるわけがない。
悪魔となり背を向けた筈の、神聖の具象そのもので、自分たちを見棄てた存在の一端。

――あぁ、忘れるものか

忘れるわけがない。
忘れられるものじゃない。
「熱っちー、出力間違っちまったよ。やっぱ慣れねぇなー【この腕】。まぁいいや、悪魔くんにゃ最期に神様の光が拝ませられたわけだし？　まっ、どうでもいいけど」
フリードの右手に握られた、およそ刃物と称するには歪が過ぎる長刀。
それはかつて砕けて散った一本の剣。聖性と栄光の残滓、世界に現出した空想にして最強の幻想。
それに縋り付くように復元された七本の内の一振りにして、奪われた三本の一つ。
「『天閃（エクスカリバー）の聖剣（ブレッド）』。目を抉り潰す速業、お見せしてあげやすよッ」
フリードという人種にはおよそ対極に在る荘厳な光を放つ異剣を見せつけるように二三、手の上で遊ばせると裕斗へと突貫を始める。
聖剣は先までのような凌辱染みた光陵が見えない。鳴りを潜めたというより、噴かせ

過ぎたエンジンが漸く正常な回転に戻った様相だ。
だが、そんなことは今更どうでもいい
。
どうとでもなるものなのだから、眼前に”それ”が在るのだとしたら、するべきは疾うに決している。
馬鹿正直に真っ正面から振り下ろされる銀尖の軌跡が空中に弧を描いていくのを、コマ撮りの映像のごとく眺めながら裕斗の両手から光が溢れだす。
轟轟と耳骨の裏で涎を垂らすナニカが、首に巻かれた鎖を咬み千切ろうと盛りを付けて唸り声をあげている。
早く、早く、ハヤク。
口内の奥が焼けて爛れていく感触を飲み下し、眼を見開く。
自身の脳天に墜ちる斬撃。
もはや回避どころか防御すら間に合わないだろう距離まで迫った白刃に向けて、左手の”物”でカチ上げた。
決意が裕斗の腕を通し、その身に宿る『異能』が宿主の想いを形にして産み落とす。
「なら、君を生かしておく理由はない」
完璧に入る筈だった一撃。それだけに弾かれた方のフリードは上体を大きく崩すこ

とになるが、続けざまに迫る右手の脅威から直ぐに身を翻し、距離を開ける。
尚も体を濡らす雨に服は重量を増してのし掛かるが、それを感じさせない機敏さで滑る地面を転がりながら光を映さない赤い瞳が裕斗を捉え、喜悦に細められた。
「キヒヒヒッ、いいねェ。イカしたもん持ってんじゃん」
裕斗の両手に燃え盛る炎と、冷気を吐き出す剣が握られる。それは彼の滾り狂う憎悪と鋭く凍りついた怨念、何よりも眼前に赫灼たる光を魅せる『聖剣』に対する先走り始めた興奮とで、落ちる雨粒たちを変質させながら輝きを放つ。
水分が蒸発し凍りついて軋みをあげる様は幻想的で、真夜中に極彩に輝くステンドグラスのような色を添え、今宵の殺人劇に佳境の幕を上げさせる。

神器　魔剣創造（ソード・バース）

木場　裕斗が宿す異能の根源が、宿主の■■に同調しその本性が這い出した。
「君は危険だ、その聖剣共々――――砕く」
駆ける。
転生魔導術式『悪魔の駒』によって刷り込まれた〝騎士〟によって底上げされた身体能力は、容易に人の知覚を外へと裕斗を走らせた。

腹の奥から沸き上がる熱。
満身に漲る力が足へ、腕へと、昏い感情を滴り落とす心へと、血潮に流れて回り廻る。
思うことは唯一つ。
眼に残るように輝く聖剣を、”破壊”する、ただそれだけ。
「ギャハッ」
打ち鳴る金属、聖なる光を燃やし凝固させんと、魔として燃える炎と凍結する刃を塗り潰さんと光を垂れ流す三竦みによる浄化と破壊のせめぎ合いが、耳障りなバックミュージックとして闘争を盛り立てるが、そんな最中で頬を吊り上げる白髪の凶人、フリードの嘲笑は止まらない。
二刀持ちによる隙を埋め尽くす戦法は、相手への牽制、不用意に飛び込む物を微塵に切り裂く。加えて騎士の力によって強化された脚力によるステップは、フリードの死角を踏み抜き奥へ奥へ、弾けた果実のような美しさを魅せてひたに差し迫る。
だが、裕斗が悪魔への転生によって恩恵を受けた戦士だとするなら――――
「ギヒ、ヒィイヒヒャハハハハハハ!!!」
――――フリードというのは天性の戦闘センスを持つ天才だ。
常人なら既に輪切りにされているであろう剣激を辛くも後ろに回避することでやり過ごしていたフリードが、炎と氷の二本に向け、裕斗目掛けて一歩、”踏み込んだ”。

「なっ!?」

「ヒャッハハハァハハハ!!」

巧みに裕斗へ向けて異剣を滑り込ませるが、彼も寸でで氷の魔剣をもってその一撃を流しやり過ごす。

一歩。たかが一歩だ。

言うに易し語るに及ばず、文字に現せば何と陳腐な二文字であろう。

だが、この一歩から戦況は大きく崩れていく。

フリードの手に持つ聖剣に発現した権能は『加速』。それは奇しくも裕斗の持つ”騎士”の能力と共通するものではあったが、同一のものではない。

『悪魔の駒』

他種族に投与することで肉体、魂を悪魔へと転生させる存在変換魔法。これによって変質させられた者たちは悪魔としての強靭な肉体に加え、”役”ごとにある能力をステータスとして行使することができる。

対して聖剣によって人が得るものは一時的で刹那的なものでしかない。

だが、駒によって得られるステータスはあくまでも本人の肉体的なものに留まるものであり、聖剣が行使するものはどれだけ希釈し使い古されたものだとしても、”奇蹟に由来する”ものに違いはない。

（まだ速くなる、だと?!）

聖剣の刃が霞む。

裕斗の騎士としての動体視力を持ってしても、剣の動きが追えなくなり始めていた。

つまり、二つの違いはここに生まれる。

悪魔の力は肉体としてのそれ。鍛え訓練することで天井知らずに成長し、いずれは何者をも超える確かな力となる。

そして聖剣によって発生する恩恵と奇跡は、一瞬のものであるとしても、容易くその領域を踏み越えるのだ。

「おら、とびっきりだぜ?」

そう静かに告げられた言葉と同時に、フリードの姿が裕斗の視界から〝消え失せた〟。

それに反応できたのは、主の元で研鑽した日々、幾多の実践を重ねてきた過去の自分によってもたらされた、極限状態にて発動した無意識の防衛本能。

体から温度が消し飛ぶ感触。

幾度も味わってきた死の感覚。そして、これは今までの比ではない。

故に体が動いた。

動いてくれた。

死にたくない――――たったそれだけの感情が裕斗の首を皮一枚で繋ぎ止めたのだ。
「オ、オオオオオオオ!!?」
獣ごとき咆哮が自分の喉から出ているのも気づかず、血管が破裂する程に力を込められた腕を、魔剣を後方へと振り抜いた。
かつて無い最速の一閃が空間を切り裂き、硬い物体に叩きつけたとき特有の手が痺れる反動に、吹き出る汗と僅かな安堵が首筋を降りていく。
だが、ここで違和感を裕斗は覚えた。
叩きつけた感触が妙に”軽い”。
鍔競り合いになったとき特有の、相手からの押し返される力が感じられない。
横に振り抜けていく片手の剣に追随するように視界が後ろを向いていく。
「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ」
そこに見えたのは、何かの冗談かのようにくるくると回転しながら、先までフリードと共に自分に猛威を奮っていた『聖剣』が気分良さげに飛んでいる。
フリード。
フリード?

フリード・セルゼンは何処に行った？

そう考えた瞬間に生まれた思考の空白を狙い打つかのように、裕斗の顎に衝撃が走った。

「？　？　？　!?」

眼球の奥で火花が咲き散り、僅かに地から足が浮き上がる。

反撃しなくてはいけない。せめて状況把握の為にも体勢を整える必要がある。それだけの思考が頭の中では出来ているというのに、まるで首から下が無いかのように動いてくれない。

原因は《脳震盪》。顎に衝撃を受けたことで脳が激しく揺らされたことによる発生するこの症状は、如何に悪魔と謂えど肉体的弱所を突かれたがための結果であった。

ならば次に挙げるべき疑問は誰がやったか。

スローモーションのように感じられるこの一瞬。眼球がギョロリと自らを殴り上げた存在を視界に納めた。

「”earth(土)to(は)earth(に)，ashes(灰)to(は)ashes(に)，dust(塵)to(は)dust(に)」

白い髪に光のない赤い瞳に修道服の少年が、何もない筈の空間から”景色を剥がし落とす”ように現れる。

そのまま突き上げた右腕を引き戻しながら、次なる左腕に一撃必殺の力を込めていく。

左拳に嵌められているのは、聖なる十字架と『in nomine patris et filii et spiritus sancti』が刻まれた純金製の拳鍔。

それが何なのか、裕斗は悪魔の本能で感じ取る。

わざわざ聖剣を囮にしてまで繰り出すそれが、悪魔を嬲り殺すには十分な代物であることに。

「AMEN」

紡がれる中身のない聖句。

それでも神の息を吹き掛けられた黄金は、愚者の求めに答えてその真価を発揮する。

狙いを据え、恐怖に引き攣る顔面を穿つために躊躇いなく拳を叩き込む。

溢れる凶笑。

黄金が裕斗の頬に突き刺さり、肉から出る筈のない爆音を鳴らしながら、その頬と奥にある歯と骨諸とも粉砕した。

「キヒヒヒ、素敵なお顔に磨きがかかったじゃん。いいよ、最ッ高、誰もが羨む超絶イケメンに大・変・身！」

例えるなら耳元で爆弾が炸裂したかのような衝撃。

一度断絶した意識が、吹き飛ばされた先で顔が地面に剃り下ろされ始めた辺りで再び意識が浮上する。

不思議と痛みがない。

右目は碌に見えないし、頬からは泥水が口の中へと大量に流れ込んでくる。どういうわけだか顎の据わりも悪い。ぐらぐらと揺れて千切れてしまいそうに感じられる。

投げ出された身体。

染みのごとく這いつくばり、脳が焼き切れたように動かない。

「オラオラ、なぁにいつまでもくたばってんだ。さっさと立てよ。たかが”顔半分が吹き飛んだ”だけだろ？　立てよ！　魔剣出してかかってこいよ!?　Ｈｕｒｒｙ　Ｈｕｒｒｙ　Ｈｕｒｒｙ!!」

笑い声が聞こえてくる。

後ろ手で『天閃』を乱暴に抜き去り、ゲラゲラと喉が破けそうながなり声で捲し立てながら、愉しげに、サンタクロースのプレゼントを待ちわびる子供のように目を輝かせている。

吐き気がする。
酷い倦怠感が肺を満たしている。体を持ち上げようと腕に力を込めたが、枯れ枝のようにあっさり曲がって泥に埋もれた。
マケンを出せと彼が叫ぶが、出そうと思っても曖昧に揺れる光が集まるだけで、形になる前に割れる硝子のような甲高い音を立てて消えていく。
鉄の味が口一杯に広がる。
残った左目が意識と関わらず忙しなく暴れ回り、その果てで飛び落ちた右目と目が合った。
「ちょとお兄さ～ん？　どうしたんですかぁ、さっきまでのギラギラした感じがねぇぞ!?　ほらっ、テメェが出した熱々にクールなヤツも・・・・・・」
そう言ってフリードが指し示した場所には、二本の剣が横たわっている。
だがそれも、彼の言葉が言い切られる前に崩れて砕けて去っていった。
それが裕斗の心を示しているかのように。
「・・・・・・あぁ、そう」
フリードの肩が下がり、酷く落胆したような声音が裕斗の鼓膜を震わせる。
その光景が彼にどのように見えたのかは分からない。だとしても、全てがどうでもよくなったような言葉と眼光から推し測れる闇の深さは、裕斗の血から熱を奪い去るには

十分過ぎた。

靴裏が地を踏みにじる音が鳴る。

規則に響く音が大きくなるにつれて、近寄る影がより大きく、裕斗の全身を覆い隠していく。

音が止まったとき、どうなるのかを想像し、どうしようもない悪寒が裕斗の脳内に大量の赤信号を焚き鳴らすが、やはり体は動いてくれない。

「まぁ、こんなんもんかにゃー、いい筋行ってたとは思うっスよ？　ちょいと根性なしでしたけど」

不意に揺れるコートの下に、鈍く光るものが見えた。

左に『幅の広い剣』。

右に『螺旋状の剣』。

そのいずれもが『聖剣』であることに間違いはなく、フリードが裕斗の前で披露した景色との同化を見る限り、そのどちらかが『透明の聖剣（エクスカリバー・トランスペアレンシー）』だ。

眼下に転がる悪魔を褪めきった眼で眺めながら、控え目に爪先を溝尾に突き入れて内臓を混ぜるように遊ぶ。

つまらない、退屈だ、とんだ肩透かしだ。

言外にそんな感情を含ませながら、【引き攣った焼き印】のような痕がある掌が、裕斗

の髪を掴み上げてフリードは語る。
「自分の好きなものは命懸けで守る、自分の嫌いなものはぶち壊す。道徳も法律もクソ食らえ。全ては自分が基準でそれ以下はそれ以下で、人っつーのは、そうあるべきなんだよ、〝そうあれかし〟ってな。で、俺っちはそう思ってんスけど、お前はどうよ？今みたいに半端なまま生きるくらいなら、『人間』でも『悪魔』ですらいられねぇなら、さぱっと死んだ方が楽ってもんだろ？」
裕斗を地面に叩きつけ、代わりに『天閃』を俯せの首筋に寝せてやる。
その手に握られた銀閃の長刀は聖なる輝きを放ち、死神の代役となるべくギロチンのごとき刃を振りかぶった。
「最期くらい笑って逝けや。でないと天国には行けねぇぜ？」
死が来る。
自分が死ぬことを確信させられる瞬間。聖剣と謳われ崇拝される刃が、その呪の究極を解き放とうとしている。
絶対不可避の死の運命。
このままいれば、死ぬだろう。
（・・・・・・そうか、死ぬのか）
死の間際に人は走馬灯というのを見るらしいが、裕斗の目には変わらぬ暗く冷たい雨

の飛沫のみ。

不思議と仲間たちの姿は浮かんでこなかった。

紅い髪の恩人も、家族同然の時を過ごした同輩も、新しく出来た友人の姿も、かつての大切な仲間たちの笑顔ですら。

いや、そもそも彼らの顔を脳裏に映し出そうとしても、薄霧がかかったように霞んでいる。

（あの時も、こんな感じだったっけ）

走馬灯という程度ではない。だが、思い出したことがある。

意識が解けて、霧散する解放感。

快感、悦楽の絶頂なんかとは違う、ただただ果てて消えて失せていくだけの根本的な消失。指から零れて吸い込まれていく砂漠の砂粒に成った感覚。それもじきになくなるだろう。

以前にも、似た経験をしたことがある。

この後に、『彼』は死んだのだ。

木場　裕斗になる前の少年は、この時に枯れ果てた。

その寸前に、薄れ行く視界の片隅に写り混んだ紅い少女がいた。　新生した木場　裕斗の今生の主として共に生きたであろう一人の少女が、微笑みと共に問いかけたこと

が、今の今更になって裕斗の頭にその言葉が過った。
厭にハッキリと。
まるで当て付けか嫌味のように。

――あなたは何を望むの？

『彼』はその時、何と答えただろう。
何と答えることができたのだろう。
死ぬ前に、その思いの丈を吐き出せただろうか。
その望みは、今も自身の中に存在できているだろうか。
自分たちの生を擲ち、逃げ去るこの背を押してくれた言葉を覚えているだろうか。
あの時、”彼”は何て――
「おいおい、こりゃあどういうことですかぁああ？」

不意にフリードの声が響いた。
未だに頭が首で繋がっている。フリードが聖剣を降り下ろしていないからだ。
何よりも、今まで余裕と凶笑を振り撒いていた男の声から明確過ぎる”困惑”が聞き取れた。
何か起きている。
打ち切られた思考がジクジクと頭の隅を小突く。
それもフリードの叫びで全て吹き飛んでしまった。
「何で【教会の獣】がいやがんだよお!?」
そんな絶叫を掻き消すように、巨大な”何か”が大量の空気を捲き込みながら裕斗の頭上を薙ぎ払う。
続いて自身の傍らに、フリードとは別の第三者が降り立つ。
黒地の軍用ジャケットに同色のボトムス。深海の青が滲んだような深い藍色の髪と、目を塞ぐように巻き付けられた黒い包帯。
そして腰から伸びる巨大な槍とも謂える、”サソリの尾針”を伸ばし男が、まるで裕斗を守るかのように立ち塞がった。
「うっは、マジっスか！　マジで本物?!　ヤッヴァいでしょこれ!!　サインか、もしくは握手してくれませんス、か・・・・・・?」

【教会の獣】

天才と持て囃される自分の先で、いつだって背をちらつかせていた存在。自分と同種でありながら、最もかけ離れた人外。

聖剣の力で辛くも回避に成功したフリードだったが、彼に畏敬に近い感情のあったのだろうか、一人はしゃいだような声をあげるが、それも【獣】の腕から噴き出したモノにより中断させられる。

それは巨大な鬼の形相をした『盾』であった。

カッと開かれた目に剥き出しに噛み締められた並びの良い歯がフリードを睨み付けるが、唐突に半分に割れたかと思えば奥の【獣】身体に異変が起きる。

バキリ

メギッ

ギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチ

骨を砕き、肉を裂きながら体から騎士兜のような十三の突起物が生え現れる。

醜悪、グロテスクと言っても過言ではない光景に思考が止まるフリードを差し置き、【獣】の胸が両開きの扉のように開いていく。

いや、正確には違った。

普通、胸の裏には”牙”など存在しないし、何よりも在るべき臓器がなく、代わりに

有るのは赤く光る暗い穴。
ここまで来れば誰もが容易に想像がつく。ついてしまう。

それは、口だった。

上顎と下顎が開ききり、耳をつんざく奇声とも咆哮ともとれる声を発する蟲の口殻。
甘く見ていたのかもしれない。
獣だなんだと誇張が流れていたと、心の何処かで高を括っていた。
所詮は人間。それ以上のことなどあり得ない。
けれども、この出逢いで確信できた。
目の前のものは、正真正銘の化物だと。
「あ～・・・・・・、これアカンやつだわ」
向きを反転、一気に逃げの姿勢へと転身するフリード目掛け、騎士兜から針の絨毯爆撃が開始される。
それはさながら、白い滝のようであり、無慈悲にもほどがある白亜の濁流だった。
数秒後。
すっかり白い針によって舗装されてしまった地面にフリードの姿はなく、暫くしない

内に針たちも黒い霧ににになって消えていき、両手の盾も同じように変質し、まともな人間としての腕と手が晒された。

だが、【獣】は徐に振り向くと祐斗に向けて、その腕を伸ばし始めたのだ。

「ッ!?!!」

腹の奥に湧き出した恐怖が、祐斗の体を締め上げた。

相手の意図が判明しない中、無造作に差し出される手はどう見えるだろう。けれども、もう既に彼には抗う術はなく、意識を保つことすら無理難題となっている。

視界の先、開かれた大きな掌から溢れ出す【翠の光】が自分を包んでいくのを感じながら、今度こそ祐斗の意識は闇へと落ちていった。

第四話　夜食はカップ麺

▼　▼　▼

晴れ渡った夜空に、半分の月が浮いている。

ぼんやりと輝く姿は、市街地の灯りに紛れて消えていく小さな星々とは違い力強く、暗い天外で確かな存在感と光を地上に示していた。

だけど、その在り方に寂しさを感じるのは何故だろうか。

他の星たちの光では、人たちが地上に敷き詰めた人工の光によって霞んで、うろんな闇夜と同化してしまう。

星というものを人の定義で喩えようとするのは馬鹿馬鹿しいことかもしれないが、届かぬ光、自身を魅せる光を届けられない様は、今の僕には酷く矮小に思えてならなかった。

そんな中にいて、月というものは毅然とそこに在り続けている。

他の誰もが空の向こうに追いやられている場所で、有史以前から依然として有り続けている。

その姿を『美しい』以外の言葉で表現することのできない語彙力の貧弱さに嫌気も差

すが、この金色の光に眼孔の奥を貫かれる痛みは、そんなことを思考の果てに捨てさせるほどの華美で僕を呑み込んでいく。

だからだろうか。

他の何もかもがその光に呑まれて見上げる美しさで空の闇に浮かび、けれども誰も手を伸ばしたところで届きはしない、自ら影に身を落とすことも出来ずにただ在り続ける様は、強さ故の孤独に感じられる。

それは、悲しい。

きっと、哀しいことだ。

「――――おっ、いたいた！　悪いな、遅くなったわ」

後ろから、自分を呼ぶような声がする。

振り向けば、目を塞ぐように黒い包帯を巻き付けた男が人の良さそうな笑みでこちらに手を振り、病院から出てくるところだった。

「ありがとうな！　お前のお蔭で〝あの神父〟、何とかなるってよ！　マジで感謝感謝だ！」

「・・・・・・・そうですか」

僕の右手を両手で掴んで上下に大きく振りながら、【教会の獣】こと、賽之目　双六は僕を讃えるような言葉を並べていく。

少なくとも僕には、フリードに襲われていた神父を助けるつもりはなかった。何より神父の傷も、僕の”顔”も治したのは彼の【中の者たち】だ。

そう何度も言っているのだが、向こうは頑として聞き入れず、挙げ句に”相手が勝手に恩に感じてる時は儲けと思え”、などと仄暗い処世術を吹き込んでくる始末。

いい加減、否定するのも疲れてきたというのもあり、されるがままにしている。

それにこの人の笑顔は、どうにも毒気を抜かされてしまう。

「そうだ、お前晩飯とか・・・・・・って、そういやぁ名前なんだっけ?」

上の前歯を見せるようなバツの悪い苦笑い。

根本的に互いが相容れない立ち位置ということを分かっているのだろうか。いや、この人の場合はそもそも気にすらしていないのだろう。

「・・・・・・裕斗、木場　裕斗です」

そして僕は、今の名前を彼に告げた。

◇　◇　◇

時間は夜の十二時を廻ろうとしている。

双六の提案によって、裕斗はかなり遅めの夕飯を摂ることになった。

本来こんな時間に何かを食べるというのは健康的ではないのだろうが、片や悪魔と職業悪魔狩りの二人だ。特に問題はないのだろう。

ただ、この時間で飲食店というのは限られたものとなるし、裕斗は未だ学生服のままである。さらに双六の容姿を一般人と捉えられるかどうか。先の病院でも包帯について『宗教上の理由』でゴリ押したらしいが、果たしてそれが万人に通じる筈もない。

自然と選択肢は限られてくる。

「ということで、カップ麺どれ食う?」

そう言って双六が裕斗に差し出しすカップヌードルが三つ。閉じられた蓋の隙間から、濃い薫りと共に白い湯気を漂わせている。

場所は移り、町内にある公園のベンチにコンビニにて購入してきた商品を挟む形で二人は座っていた。

ちなみにこのカップ麺の他に、オニギリやパック詰めの唐揚げと野菜サラダ、緑茶と缶ビールがコンビニの袋に入っている。

結構な量だが、双六曰く二千円以内に納めたとのこと。彼の中では一人頭千円という決まりでもあるのだろうか。

「じゃあ、シーフードを・・・・・・」

「んじゃあ、あとは〝俺ら〟が貰うな」

零さぬように三つの内の一つを裕斗に渡すと、双六は残った二つを手に取り片方を自身の胸の前にもってくる。

端から見れば奇妙な行動だったが、隣でそれを見ている裕斗がその行動の理由を知っていた。

だから、身構えずにはいられなかった。

脳が痺れるほどの緊張が走る中で、双六は自分の中にいる一体に語りかける。

「ほら、〝喰っていいぞ〟」

その言葉が言い切られる前に、カップ麺を持った手に〝胸から噴き出した〟『鋼のサソリ』が喰らいついた。

「ッ!?」

「あー、大丈夫だぞ？　甘噛みだから」

双六の腕ごと咀嚼する『サソリ』の姿に思わず立ち上がりそうになる裕斗だったが、当の本人はいたって呑気なものでカラカラと笑ってみせる。

これこそ双六が【獣】と称される理由だ。その身体の中に幾つもの化物を飼い慣らし、それらの体を使って戦う様から彼はそう呼ばれるようになった。

双六はその化物たちを【アラガミ】と総称している。

【アラガミ】、つまりは『荒神』。

大仰な名前と本人は自嘲しているが、裕斗からすれば人に厄災を振り撒く神の恐ろしい一面が〝アレ〟だというなら、それは的確な命名に思えた。

そう、思えたのだが・・・・・・。

「おい、そっちは俺の。待て、今喰ったろお前は、だから待てよ!? 俺はまだ一口も喰って、あっ、あああああああ!?」

大声で食べ物の取り合いをしている様は、色々なものを台無しにされたような、途方もない疲労感が肩に凭れ掛かるようだった。

あとで聞いたことだったが、神父の足も吹き飛ばされた裕斗の顔も傷一つなく再生させた”翠の光”は【アラガミ】たちによるものらしく、彼らの細胞を一時的に植え付け活性化させることで、欠損した箇所を再構築させる際に発生するものらしい。

言ってしまえば、今こうしていられるのは彼らが居たからこそなのだろう。

「いい加減にしろよ”ボルグ”! おら、唐揚げ喰わせてやっからビールは俺に寄越せ。・・・・・・よし、取引は公平であるべきだよな」

一応の決着は付いたらしく、双六はビールを煽り、『ボルグ』と呼ばれたサソリは双六の腰から再び自分の尾針を伸ばして器用に唐揚げを口に運んでいる。

その光景は奇異極まるものであったが、頭を空にして見るならコミカルな掛け合いに頬が弛みそうにもなる。

だが異様は異様。

異常以上に異形が過ぎる。

「・・・・・・・・・」

裕斗の心にこびりついているのは放課後での一幕。彼が他二人と来訪したときに見せた少女の悲痛な表情。

特異な出自である彼女が、この男の中に何を見たのかは分からない。だが、その片鱗が眼前にその様相を見せている。

・・・・・・どうすればいい？

現状、双六は裕斗に対して不気味なほどに友好的だ。悪魔や人間だというフィルターを廃して、彼は眼前の相手をそのままに相対する、信仰や思想といったものに染まらない稀有な種別のタイプなのだろう。

「・・・・・・・・い？」

だから、裕斗は余計に双六を警戒せずにはいられなかった。

人を信じるということは人間関係構築において重要なテーマとなるが、ときには致命的な隙となる。

つまりはこの状況で、露骨な善意を振り撒く人間ほど信用すべきでないということ。

「おー・・・・・・いてる？」

どうすればいいか、裕斗は思考する。

この男を、どこまで信用するべきか。信用できるのか。その配分と裁量を、今ここで

はっきりすべきだろう。
そう、いざとなれば双六との血戦さえ想定し――――
「”オウガ”、甘噛み」
突然、裕斗の周りが暗転する。
何事かと顔を上げようとすると、すぐに後頭部が何かにぶつかった。妙にぶよぶよしていて、ぬるりと濡れた感触に包まれている。
頭に何かを被せられたのだということは直ぐに判ったが、それが何なのか判別できない。
いやむしろ、考えたくないというのが本音なのかもしれない。
唸りのように響く空気の鳴動、人肌程度の生暖かさを含んだ風、暗がりに慣れてきた目が最初に捉えたのはピンク色の肉々しいナニカ。
もしかしなくとも、生き物の口の中だった。
「戻ってきたか?」
数秒後、解放された裕斗が新鮮な空気を吸い込むと同時に自分を覗き込む者と目があう。”右目の無い”新たな怪物が一匹、白い頭殻に剥き出しの歯、サイの角のように鋭く伸びた二本の牙を持つ化物が双六の肩から生えていた。
「なんか難しい顔してっけど、さっさと食わねぇとラーメン伸びちまうぞ?」

まさかそんな理由でこの怪物を嗾けたのか、と思わずその笑顔向けて吐きつけそうになるのをグッと堪え、堪えた分だけの二酸化炭素が肺の奥から堰をきって溢れだす。

・・・・・・もう真面目に構えるのが馬鹿らしくなってくる。

様々な諦めと双六の勧めのままに蓋を開けてカップの麺を啜り込む。所詮はジャンクフードと思う節はあるが、空腹と雨で冷えた体には最高のご馳走にも感じられた。

それから暫く言葉はなかった。

食べ物の咀嚼する音と、二体の怪物が双六のビールを奪おとするに抵抗するドタバタ音だけが響き、裕斗はそんな様を横目に食を進めていた。

「・・・・・なぁ、木場くん。食いながらでいいから聞いて欲しいことがあんだけどよ、あぁ、今回の”相手連中”についてだ」

騒がしい沈黙の中で切り出されたのは、幾分か固さを含んだ双六からの情報提示。

カップのスープを飲み干し、双六へ向けて視線を動かす裕斗に語りだす。彼が言うには、意識の戻っていない神父が譫言のように呟いていたことがあるらしく、今から話されるのはそれについての推論だった。

「アイツが言っていたのは、『聖剣』『実験』『錬金術』、・・・・・先遣隊の連中が全滅したこと。そして、やったのは――――」

「・・・・・・《バルパー・ガリレイ》」

知ってるのか、と驚きの色を含んだ調子で聞き返してくる言葉に返事をせず、裕斗は空になった容器の底を虚ん な目で覗き見る。

バルパー・ガリレイ。

教会が保有する錬金術師の中でも群を抜いた才を持つ男。

冶金や生体に関する研究を専門とし、医術、神秘学、人工生命にも精通する様と、ある”趣向”から【水銀（トリスメギストス）】などとも呼ばれた賢老。神を否定することを教科書の一歩目とし、人間の手によって奇跡を造り出す、教会公認の冒涜者たちの頂点だった。

彼は有名だ。

その悪名は教会の歴史に黒点のごとく、燦然と穴を穿ち空けた。

「『聖剣計画』のことは、よく知っています・・・・・・」

苦痛を刻んだ声で裕斗が告げた言葉に、双六は途端に顔をしかめた。

教会の闇の象徴と言える大事件。神に仕え、信仰の守護者たるべき者たちが血で染め上げた地獄の底のような所業。幾重にも折り重なり、積み上げられた死体が弔われることもなく灰にされた狂気の実験。

四年前に終止符を打たれたそれは、今も教会の人間たちの記憶に色濃く残っている。

「聖剣、錬金術ときたら、あの男しかいないでしょう・・・・・・」

裕斗はよく知っていた。

その恐怖と暗闇を。

よく知っている。あの惨状を、誰よりも近くで見てきたのだから。

「確かに、聖剣と錬金術とくればあの爺さんしかいないだろうな。だけど、だからこそ不可解な点がある」

「？　不可解、何がです？」

「なんで今更に、聖剣なんてもんに手を出したかってことだよ」

対して双六は裕斗の意見に至極全うに肯定したが、新たに疑問を出してきた。

それこそ今更というものではないだろうか。

バルパーという人間の噂を端的にでも聞いたことがあるならば、その性癖と偏執性は知られているはずだ。

曰く、聖剣狂い。

聖剣という存在は、どんな人間であろうと多少なりとも興味を惹かれるものだ。そんな中で、バルパーの聖剣に対する執着は常軌を逸していたという。

学者、研究家というのは大小なりにどこか正道を外れた思考をするものというのは、偏見を抜きにしても在るものだ。

だからといって、『皆殺し』とまで呼ばれるのは、彼くらいなものであろう。

だから、彼は教会を追われることになる。

否、自ら逃亡を謀り、そして逃げ切った。
道すがらに迫りくる追っ手の尽くで足下を赤く染め上げながら、彼は行方をくらますことに成功する。
そんな彼が聖剣を盗み出すことが不可解か。むしろ、自然と言うべきではないだろうか。
なんの隔たりもなく、気兼ねなしに聖剣を思うままにできることは、この上無い至福の瞬間であることが容易に想像できた。
裕斗の疑心に満ちた視線を受け止めながら、双六はどう答えるべきか思案するように『オウガ』の喉を撫で上げ、暫くしてこう答えた。

「バルパー・ガリレイは、現存するあらゆる聖剣に欠片も興味を持っていない」

――――――――――――えっ？

「・・・・・・十数年前に、一度向こうから訪ねてきて話す機会があったんだ。そん時に散々聞かされたよ、他人の創造物を振り回していい気になるなんて愚癡の極みだかどーとか。挙げ句に、俺の”一部”を研究材料として提出しろと催促もされたよ」

思考が凍結する裕斗を横目に捉え、敢えて畳み掛けるように双六は言葉を紡いでいく。

「”第二次”聖剣計画。ヤツが『皆殺し』の忌名を付けられる実験も、教会の一部の上層部が、バルパーの研究に痺れを切らして強要したものだったらしい」

双六の内で黒いモノが渦を巻く。

おおよそではあったが、隣に座る少年の正体に彼は勘づき始めている。少なくとも、生まれついての悪魔ではない元人間の転生体、加えて教会に近い所にいた子供であるということに。

後は連想ゲームだ。

「本来、聖剣計画はバルパー・ガリレイだけのものだった。そこに教会が乗っかる形で今の形になった」

これを裕斗に伝えることに意味があるとは到底思えない。この真実が彼にとっても、

これからのことでも益になるはずがない。
それでも伝えようと思ったのは、今から向かい合う相手がどういう存在であるかを知っているべきだと思う、双六の思想（マニフェスト）からだった。
殺し殺されるだろう相手を、ただ殺し殺されるだけにしたくない。
所詮は身勝手な自己完結。
けれども、それを忘れてしまえば、きっと人は本当の意味で【獣】以下に成り果てるのだろう。
「聖剣計画の本当の目的、バルパーがやろうとしていたのは”聖剣の創造”。神の力を介さない、人間だけの為の、自分の為の聖剣を造り出すことだった」

第五話　変わらない友情

「アッハハハ!?　おま、お前！　マジでスゲーな!?　で、その後どうしたんだよ?」
「そのときは、あと少しで全員の下着がコンプリートできそうな瞬間に松田がクシャミをしまして・・・・・・」
「ぶふっ、で、オチは?」
「生徒指導室です」
「ハハハハッハハハハハハハ!!」
　それは至って普通の光景と言えるだろう。
　休日の公園にて一人の男子高校生と、目に包帯を巻いた男が騒がしく日々の語らいをしていた。端から見れば、仲の良い先輩後輩といった印象を持つであろうが、一歩引いた距離から眺める二人の男女からは明らかな緊張が伝わってくる。
「スゲー青春してんなぁ、一誠！　よくＰＴＡが動かねぇよ」
「ふふん！　ＰＴＡごときに俺たちの探求を阻むことはできませんよ?」
「増える草食系の真反対を行く、究極の特攻肉食系男子だな」
「変態三人組と言えば、この兵藤　一誠です！」

「そんな君の夢は？」
「ハーレム王に、俺はなる！」
「「ギャハハハハハハハハ!!」」
　声高らかに公共の場で黒歴史を語り合う兵藤　一誠と双六、それを眺める塔城　小猫に匙　元士郎のもとへ、遅れてやって来たイリナとゼノヴィアが合流、計六人が集まった。
　そう、一見これもまた有り体な青春の一頁に見えるだろうが、双方の関係に異常がありすぎた。
　片や教会のエクソシスト、そして悪魔の眷属の組み合わせ。
　止まらぬ猥談に花を咲かせる二人を除いた四人の気まずい空気も相まって、なんとも言えぬ混沌が形成されていた。
「でも、ハーレムか、いきなり難易度高いの来たな」
「やっぱり男ならハーレムって燃えますよね！」
「あー・・・・・・・・、俺はそうでもねぇな」
「えっ!?　何でですか!?」
「いやまぁ、何つーの？　大人になると色々あるんだよ」
「つまり取っ替え引っ替えのヤりまくりってことですか!!」

「はぁっ!?　いきなり話飛びすぎだろ！　色々だよ、色々」
「エロエロですか?!」
「言葉通じてる!?　あれ、悪魔って自動翻訳機能ついてたよね!?」
「児童こんにゃく!!?」
「もはや意味不明!!!」
「いい加減戻ってきなさいよ!?」
場所は少し移動し、ベンチの並べられた公園の隅へ。
止まらぬ猥談がヒートアップする二人に、それぞれイリナが制止のツッコミを入れて静かにさせる。
類は友を喚ぶ、ここに種族や身分を超えた友情が生まれつつあった。
「・・・・・・それで、悪魔が私たちに何のようだ」
和気藹々とする馬鹿二人で弛んだ空気が、ゼノヴィアの声によって引き締まる。
事の発端は、やはり聖剣がこの町に持ち込まれたことだろう。
暗雲の内部で息を潜める外道の衆。歪んだ因果によって暴走する仲間。自分たちが関与せずとも進む事態に、痺れを切らすのも自明の理。
「つまり、聖剣の破壊に協力したい、てこと?」
イリナの疑問符に、一誠は力強く頷いた。

何故に悪魔がこんな厄介事に首を差し出すのか。
それは兵藤　一誠という元人間にして、左腕に龍を宿した今代の『赤龍帝』にしてみれば些事なこと。
死ぬのは御免だ。だが、苦しむ友に背を向けられるほどに、彼の心は冷徹にいられはしない。内心では戦々恐々しながらも、そのさらに深部にて、赤く輝く血潮の脈動は確固たる決意に天上を焼く炎を巻き上げる。
顔を見合わせる三人に心臓の音が脳内を席巻し、あわや爆発四散しそうになったとき思いがけない答えが響いた。
「いいんじゃないか？」
「はい？」
「ゼノヴィア!?」
あっさりと肯定の意を出したのは、最も難関と思われていたゼノヴィアだった。
思いっきりの肩透かしを食らった一誠を余所に、イリナがゼノヴィアに食ってかかるが、互いの信仰を貫くためにもここは悪魔と手を組み、生還率を上げることを最善とするべき、ということで話は纏まりつつあった。
「双六も、それでいいな？」
「いや、よくねぇよ」

胸を撫で下ろすような思いだった一誠一行に、突き落とすように否定してみせたのは双六だった。
小さな悲鳴をあげて一誠の背に縋りつく小猫を見えないながらに視線で捉えて、彼は苦笑いに髪を掻き回す。
「な、何でですか!?」
「純粋な戦力差だよ。今更、お前ら三人が混ざったところで、何かが変わるとは思えねぇ」
「だとしても・・・・・・!」
「二つに、お前ら主にちゃんと断って来てるのか?」
詰め寄り声を荒げる一誠を押し止めるように、問いを重ねる。
喉を詰まらせたように黙る彼に、やっぱりか、といったように双六は呆れたように口を歪ませた。
「別にかまわないだろ、双六。彼は悪魔であるが、望んで力を貸すというのだ」
「そういう問題じゃねーだろ。そもそも教会の面子とかどうすんだよ」
「確かに悪魔に力を借りるのは教会としても問題があるだろう。だが、彼はドラゴンだ。それに、報告しなければバレはしない」
「誰がトンチを言えといった。ていうか、お前の信仰的にアリなのかそれ?」

「私の信仰は柔軟なんだ」
「・・・・・・さいですか」
色々な諦めを込めた咳払いを一つし、双六は再び視線を一誠らに向ける。
「お前の仕えるグレモリー家は、情愛に深いって聞いてるぜ？　そんな彼女が自分の知らないところで身内がっんなことになってるなんて知ったら、どう思う？」
「そ、それでも俺はッ！」
「一旦、冷静になれ。お前の力、そこの二人を天秤に賭けられるほどのもんなのか？」
完全に言葉を詰まらせる一誠の視界に、自分の裾を掴んで離さない小猫といたたまれずに顔を青くする匙が写る。
小猫も、ましてや匙に至っては自分が無理矢理巻き込んだようなものだ。
今さらながらに一誠は自分の肩に、二つの命が乗っていることを自覚する。相手は堕天使の幹部と聖剣。駆け出しの自分たちが相手取るにしては荷が重すぎる。
それでも、僅かながらに慢心できたのは、左腕の強大な神滅具（ロンギヌス）『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』の存在があったからか。
「でも・・・・・・・！」
思い起こす。
いけ好かないあのイケメンを。いつも、困ったような笑顔を見せながらも助けてくれ

た仲間のことを。
そんなヤツが、今はいない。
一人で藻掻きながら、何もかもを片付けようとしている大馬鹿が。
一人だ。
一人でだ。
それが、一誠には我慢ならない。
「だとしても、仲間を簡単に切り捨てられるわけがありません!!」
「ならどうする。自分の命に代えても二人は守る、なんて寝言言うなら踵落とすぞ」
「言いません！　あの馬鹿も纏めて四人であの学園に帰りついてみせます!!」
立ち上がり、眼前の双六に全霊の感情を叩きつける。
それは一誠という悪魔の生き様であり、在り方の全てだった。
「お節介だってならいくらでも押し付ける！　邪魔だって言われようと押し掛ける！　今までだってそうしてきた！　俺は悪魔だ!!　俺のやりたいようにやって、俺が護りたいものを護る！　それが俺にできることです!!」
息切れを起こしながらも、その眼光に一切の衰えはない。
シスターを救うため堕天使とエクソシスト詰め寄せる廃屋に乗り込み、一度は負けようと龍に己を捧げ炎の不死鳥を打ち倒した。

その信念、折れぬ魂の柱は今なお健在である。
実に欲深き、悪魔らしい独占的な正義だった。
「・・・・・・でも、結局ご主人様はどうするんだ?」
「うぐっ」
対する双六はニヒャリと笑ってみせる。
楽しげに、面白げに、目を白黒させる二人の聖剣使いを差し置き、自分一人で浸るように笑っている。
「・・・・・・いいか、ヤバくなったら逃げろよ。俺が死体になってでもお前らの逃げ道作ってやる」
「えっ、どういう・・・・・・」
「ということらしいぜ、〝木場くん〟」
彼の口から出た名前に、三人が視線を周囲に走らせると、その背後から見慣れた男が歩いて来ていた。
「アイツは・・・」
「昨日話したろ、お前らの先輩だよ」
身構えるゼノヴィアとイリナを制しながら、祐斗と双六の視線が重なる。
互いに無言。

裕斗の目には訝しさと疑心が。双六は元より目なんて見えない。
いつでも飛び掛かることができる場所で、祐斗は二本の聖剣を一瞥し一誠たちに向き直る。
「・・・・・・僕は、復讐を止めるつもりはない」
視線を外すことなく、祐斗は独白する。
それが誰に向けてか、祐斗は一人語る。
己の憎悪の根源を。
地獄の底、生を否定され、消耗品として扱われる日々を死に怯えながら、それでも救いを信じて神への祈りを続けてきた。
だが、ついに被験者の全員が処分されるまで、神は降りてこなかった。
「神は僕たちを救いはしなかった。でも、僕は悪魔に救われた。だから僕は、聖剣を、教会を、神を憎む。復讐することこそ、彼らへの弔いだと思っている。だけど、君はどうやっても退かなんだろうね、イッセー君」
「ああ、お前が自分から地獄に頭突っ込むっていうなら、それを引き抜いてやるのが仲間の仕事だからな」
睨み合う二人。だが、険悪とは違う。互いが互いを按じるが故の譲れぬ一線。
覚悟と決意の軋轢が、ギシリと噛み合いながら火花を散らす。

「なぁ、猫のお嬢ちゃん」
唐突に、双六は小猫の背中を指先で軽くつつく。
それに明確な恐怖の感情を露にしながら振り向くと、軽く両手を上げながら、苦みを滲ませる笑いを浮かべた双六がいた。
「こういう時はな、女の子が言ってやると効果的だぜ？」
「・・・・・・？」
「居なくならないでー、ってな感じでいいんだよ。そうすりゃ、途端にあいつらも笑い出すさ」
「・・・・・・そう、なんですか？」
「勿論！　女の子だけの特別な魔法だよ。上目遣いとか特に効果的。男ならイチコロ間違いなしだぜ？」
「・・・・・・・・・・・・・・」
小柄な小猫に目線を合わせるように片膝をつきながら、双六はそっと彼女の背中を押してやる。
困惑と抜けきらない恐れこそあったが、何かを決心したように一つ頷くと、小猫は祐斗のもとへと駆けていく。
それを満足気に眺めながら、双六はより一層笑みを深めた。

「・・・・・・なんで、そんなに悪魔の肩を持つの？」
そんな双六へと複雑な心境を声音に隠さず、イリナが眉根を寄せながら消化不良な思いを告げる。
「変か？」
「変、っていうか・・・・・・」
「教会に属する者とは、とても思えないな」
「いや、俺って神の戦士っていうより、教会相手に仕事受けてる傭兵みたいなもんだし・・・・・・」
「それなら尚更だな」
キッパリと言いはねるゼノヴィアに、片膝を付いた姿勢のまま僅かに苦笑を浮かべる。
なんとか誤魔化そうと間を空ける双六だったが、突き刺さる視線は鋭さを増すばかりで衰えない。
「・・・・・・仲間を何とかしてやりてぇと思うヤツに、悪魔も人間もねぇさ。それに実家の弟と妹にこんくらいのがいると、なぁ？」
そう言って困ったように笑う双六に、二人は彼が孤児院育ちであることを思い出す。
彼の中の正義感、もしくは家族愛とでもいうものか、それはイリナとゼノヴィアにも

理解できるものだったが、悪魔という事実が納得をさせないでいる。
「まぁ、何があろうと俺が何とかするよ。お前らは絶対に生きて帰す。任せときな」
「・・・・・・そういうお前が、私たちに守られぬようにするんだな」
「ハハッ、こいつは手厳しい」
ヘラヘラと笑う双六に、どこか諦めたように溜め息を吐くゼノヴィアとイリナだった。

第六話　男子高校生の日常会話

「ありゃりゃしたー」

気のない店員の声を聞きながら、コンビニの自動ドアから〝三人の神父〟が店舗を後にする。

もちろん、一誠、匙、双六の三人である。

公園での一件から数日、二人は双六たちと共に聖剣を捜す日々を過ごしている。ちなみに非公認、悪魔である一誠一行の四人は、結局自分たちの主へ報告していない。止められるのは明白であったが、最も心配していた双六が掌返すように了承したのが一番の理由だったろう。

曰く、男なら言ったことには責任持て、らしい。

「・・・・・・ていうか、本当にこんな〝服〟着てるだけで出てくるんすか？」

匙は今自分が着ている、聖職衣（カソック）の襟を摘まみながらそんなことを呟いた。

双六が一応の正装ということで持ち込んでいたものの予備である。

「多分、出てくる。おそらく新しい飼い主様の引っ越し先をバレないよう、律儀に猟犬やってるだろうからな。ほい、唐揚げ棒」

店先の唐揚げ棒を買い占めるという暴挙を平気で行いながら、三人はモサモサと唐揚げを平らげていく。

そんなこんなで十本近くあった唐揚げも無くなり、奪われた水分を補給するために三人がペットボトル内の清涼飲料を喉に落としていく。

「なぁ、匙やん」

「ん、なんすか？　ていうか、呼び方・・・・・・」

「好きな娘いる？」

「ごふっ」

飲んでいた炭酸が気管に入る激痛に、匙が盛大にむせているのを腕を組みながら眺める成人男性がいる。

もちろん、双六である。

「その様子だといるみたいだな。可愛い？　それとも美人系？」

「ごほっ、いや、ぐぶふ、な、何でそんな話　ごっふぉぉおおっほほう!?」

「いや、どんだけむせてんだよ。『ほほう』ってなに？」

「ぐぅっ、だから、何でそんな話になったんすか!?」

「流れ的に？」

「何処にそんな流れがあったんだよ!?」

「賽之目さん！　コイツ、会長が好きなんですよ！」
「兵藤テメェーーーー!!?」
双六のぶっ込んだ質問に喉を痛め、あげく一誠の不意な裏切りに匙は有らん限りの絶叫をあげる。
弄る側と弄られる側の対極が完成した瞬間である。
「会長ってことは先輩か。あと俺を呼ぶときは双六か、ロクでいいぞ」
「分かりましたロクさん！」
「いい返事してんじゃねぇよ兵藤!?　いいか、変なこと言うなよ？　言ったらお前・・・・・・・」
「で、コイツのマドンナってどんな感じ？」
「すっげー厳しそうですけど、スレンダー系の知的美人です」
「アアアアアアアアアア!?」
夜中の住宅街に男子高校生の悲惨な絶叫が響く。これも弄られる側の宿命と言えるだろう。
「へー、脈あるの？」
「・・・・・・えーっ、まぁ」
「適当にどっちとも取れる濁し方すんじゃねぇよ!?」

「いや、大丈夫だって！　お前の会長への熱い思いを知ればきっとイケるって!!」
「なにそれ詳しく」
「兵藤、お前マジで少し黙ってくんね!?」
熱い思い。それは一誠と匙がお互いに同士、もしくは同類であることを確認しあった瞬間に告白した至上の野望。
言えというのか？　この場、この状況で。匙はひたすらに自問自答する。
無垢に輝く一誠の隣で、ニヤニヤしながら腕を組む双六に、逃げられはしないことを確信してしまう。
（いや、冷静になれ。ジョースター卿も言っていたじゃないか！　逆に考えるんだ。話してもいいじゃないか、と！）
それはただの諦めだ、ともしここに彼の主がいたならそうツッコンでいたことだろう。
（そうだ、冷静になれ。素数を数えるんだ。素数は何者にも割れない孤独な数字。1、2、3、4、5、6・・・・・・・・よし！）
覚悟完了。当方に猥談の用意あり。
素数数えれてねぇよコイツ馬鹿なんじゃねーの、というツッコミはお控えください。彼は疲れているのです。

キリッと俯く顔上げ、二人を見据えながら初めて彼女に出逢った頃から胸に秘めて煮詰めていた欲望を、心高らかに宣誓する。

再度言います。彼は追い詰められています。

「俺の目標は、ソーナ会長とデキちゃった結婚することです！」

「よく言ったぞ匙！　ちなみに俺の目標は部長の乳を揉み、なおかつ吸うことです！」

そんな匙の男気（？）に触発され、一誠も調子に乗って意気揚々と宣言する。

今の二人はまさに無敵だった。

無駄に昂るテンションは彼らから常識と羞恥心を抹消し、肩を組み合わせながら弾けるような笑顔が二人の青春を象徴するように街灯の無機質な光を霞ませる程の輝きを魅せる。

「「こんな俺たち、どうですか!?」」

「いや、普通に引く」

「「えっ」」

だが現実はいつだって非情であり、これが当たり前である。

「いや、一誠のは百歩譲っていいとしても、お前のはアカンだろ。世間体とかじゃなく、それをしたいと思ってる時点で、こう、人間としての根幹的な倫理の部分でアウトだろ。高校デビューで周りに溶け込むために有りもしない性癖言ってみた、とかじゃ・・・・・・

ないのか？」
「・・・・・・・・・・・・・」
「匙!?　ロクさんコイツ息してねぇ!!」
　虚ろな目で力尽きた匙を、世界の中心で愛でも叫びそうな構図で一誠が抱き起こす。
　一誠の場合は普段からのこともあり耐性があったが、匙のメンタルでは双六の一言は耐えられなかったようだ。
「なぁ、匙。お前って下に妹とか弟いねぇだろ？」
「・・・・・・いないっす」
「大変だぞ？　子供ってのはこっちの言うことは聞かねぇし、目ぇ離せば神隠し、気づけば室内大旋風。俺なんか下に妹と弟が十人以上居たからスゲー苦労した」
「「十人!?」」
「あぁ、孤児院育ちだからな、俺」
　色々なものが砕けてしまった匙に、双六は自身の経験談を聞かせることにした。
　一般家庭で育った二人にとって、孤児院育ちというだけで中々重い話題であったが、その下に十人の兄弟ということでさらに絶句する。
「子供ってのはな、愛してやれるまでが大変なんだよ。なにやっても好き勝手する奴らを、面倒だなんて思わずに最後まで責任持ってやる自信があるか？　男親なんて、九ヶ

月も腹の子供を守り続けた母親よりも親の自覚が希薄がちになっちまうんだから」
「・・・・すいません」
「まぁ、変にキツく言うつもりはねぇけどよ。それに俺んとこの場合は、子供より”母さん”の方が大変だったし」
「ロクさんの、お母さんですか？」
「育ての親ってやつさ。肉体労働は得意だったんだが家事、とくに料理の類いが苦手でな。卵の殻とかも百発百中で入るし、それに誰かが泣くたびに・・・・・・」
「泣くたびに、どうしたんすか？」
　最後の所で言葉を切って頭を抱えてしまった双六に、匙が気になり先を促すように言うと、ポツリと彼は答えた。
「・・・・・・ガトリング持ち出してくるんだよ」
「はぁっ?!!?」
　息の合った叫びに、言った本人は大仰に溜め息を吐く。
　ちなみにガトリングとは複数の銃身円形に並べ、それを外部動力で回転させながら給弾・装填・発射・排莢のサイクルを繰り返して連続射撃を行う機関銃のことである。
「えっ、冗談すよね？」
「破壊された扉を修繕してる内に軽い小屋くらいなら建てられるようになったぜ」

「・・・・・・な、何者なんですか？」
「《棺担ぎ》っていう人類最強。ご主人に聞いてみ？　すぐ分かるぞ」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・子供思いのいい母親なんだが、その場のテンションに流されがちでな。まぁ、あれだよ、取り敢えず勢いはアカンよ、って話。あぁでもなぁ・・・、俺も〝アイツ〟のことあるしなぁぁぁ」
「誰ですか？」
「・・・・・・・聞きたい？」
「はい」
　乗っかった船、周りの年上といえば女性ばかりの二人からすれば、双六という同性の大人の話は非常に興味の惹くものだった。
　双六は二人を連れて、手近にあったバスターミナルのベンチに座り、話し始めた。
「そうだなぁ、五年前か。俺が十九の頃に、上からある女悪魔が悪さしてるから潰してこい、って言われてな。まぁ、上の性欲馬鹿がソイツに引っ掛って金奪られたからその腹いせだな」
　疲れきった溜め息を吐く双六に、一誠も匙も頬を引き攣らせる。
　如何に公正清廉な組織でも、長く続き肥大化すれば中から腐り出すのはどこも同じな

のだ。
「でも、やっぱり悪魔だから、その・・・・・・・」
「いや、やってることも魔力で男の精神を弄くって籠絡させる、美人局(つつもたせ)みたいなやつさ。殺しも死人も出ててねぇから、適当に仕置きして冥界に送り帰そうとしたんだよ」
「そういうのもアリなんすか?」
「駄目だね。だけど、いいんだよこれくらい。殺し殺さればっかじゃ、救いが無さすぎる」
　染々と語る双六に思わず感嘆の声をあげる二人。
　とくに一誠からしてみれば、フリードやゼノヴィアといった排他的なエクソシストしか逢ったことがなかったからか、存外に嬉しそうだった。
「んで、パッと見つけてサッとしばいて、さっさか叩き出そうとしたんだけどよ・・・・・」
「何かあったんすか?」
「・・・・・・押し倒されてな」
「「おおおおおおおお!?!!」」
　思春期真っ只中の男二人が、テノールのデュエットを市街地内に反響させる。
　押し倒す。ある意味、男の夢というか本能的に訴えかけられるシュチエーション。
　しかも、”した”じゃなく、”された”だ。

煩悩が手足を生やしているような一誠はもちろん、匙でさえ明確な興奮を隠しきれずにいた。
「ロクさん！　そ、そのお相手はどんな感じの方だったんですか!?」
「場所はどこっすか？　やっぱ屋外っすか!?」
「少し落ち着け。まぁ、今思えば胸も背丈も足りなかったが、顔はかなり整ってる将来有望の美少女だったよ。あと、場所はビルの屋上」
「「ふぅぉおおおおおおおお!!?」」
二人のボルテージは、遂に最頂点に辿り着き、止まらぬ上昇が脳内麻薬を異常分泌させる。
もはやジャングルクルーズと化した狂気の鍋底で、チェリーが二つ舞い踊る。
「とにかく煽るのが上手かった。俺の耳を甘噛みしながら鈴みたいな声で誘ってきやがるから、正直かなりマジになってたよ」
もはや二人は喋らない。
彫像のように黙り、一音たりとも聞き逃すまいと正座しながら爛々と光る瞳で次の展開を待ち望むばかり。
「拙い手つきで俺の服をめくって、細い指が腹を擦るのさ。んでもって一言、『シよ？』だとさ。文字通り悪魔の囁きだな」

二人の表情が、もはや文体に表現するのも憚られる程に酷いことになり始めた。
とにかく鼻息が荒く、男でも見れば反射的に悲鳴を上げてしまいそうになるような顔になっているとだけ言っておこう。
「俺もご無沙汰だったからよ、勢い任せに手を出しちまおうかな、って思ったんだ。したっけよぉ・・・・・・」
急に悲痛な声を上げ始めた双六に、二人は怪訝そうに首を傾ける。
クライマックスはすぐだと言うのに語らぬ先輩に焦れて声をかけようとしたとき、事の顛末が知らされる。
「・・・・・・泣き出してな」
「「ん？」」
予想の斜め下、むしろ上だろうか、とにかく理解の追い付かないオチを知らされ、困惑する二人に双六は話を続けた。
「実は初めてでだったらしく、俺がエクソシストだから殺される、っていう脅迫観念から勢いで押し倒したらしいんだが、結局俺自体も”する”のも怖くなって、らしい」
「「・・・・・・・・・・・・・・」」
「しかも後から聞いてみれば、その時十四歳だったていうじゃねぇか。中学生だよ、俺中学生に興奮してたのかよ、どんな鬼畜だよ。お巡りさん俺でーす、みたいな？」

すっかり二人を置いていき、一人でブツブツと自己嫌悪の暗黒面に落ちていく双六を、一誠と匙は何とも言えぬ気まずさで眺めていた。

「いいか、二人とも。若さに踊らされるなよ？　勢いでやって上手くいくのなんざ、山勘張った期末テスト程度だ。でないと、俺みたいに引きずるぞ？」

実はこの人、結構ダメな人なんじゃないだろうか。

二人は声に出さず、そう思った。